

令和 6 年 全国広報コンクール受賞・入選作品（神奈川県内）の概要

【神奈川県「県のたより」（9月号）】

【主な記事の掲載意図】

9月号は「関東大震災から100年もう一度見直そう身近な防災対策」をテーマに、特集号として通常号より4頁増の12頁構成の記事を作成しました。

関東大震災において震源域の直上にあった神奈川県では、県内全域で強震や津波、火災等による被害が多発しました。表紙には、当時の横浜市街地の画像を用い、被害の大きさを端的に表現するとともに、次ページ以降の防災対策への誘導となるように興味をひきつけました。

裏面となる12面には表紙の画像も展示する県立歴史博物館の展覧会の情報を掲載しました。震災時の画像と同じ場所・アングルで現在の様子を撮影し、並べて掲載することで過去と現在の対比を強調しています。

2～5面の「身近な防災対策」では、県民が防災を自分事としてとらえ、「実際にやってみよう」と思えるような内容になるよう意識しました。

2・3頁では、発災前の防災に焦点を当て、防災教育の識者である慶應義塾大学大木聖子准教授に災害について知る、備えることの大切さを伝えてもらいました。地震防災チェックシートの紹介は、項目をリストにするだけでなく、特に気を付けるべきポイントをふきだしにしてメリハリを付け、理解しやすいようにしています。

4・5頁では、地域で長年防災に係る普及啓発活動に取り組んできたボランティア団体の取組を取り上げ、身近なものでできる生活者目線の防災の知恵を紹介するとともに、防災について学べる施設やイベントを紹介しました。

6・7頁では、かながわの文化を楽しむ、伝統に触れるとして画像を大きく使い、かながわの伝統文化の催しを紹介しました。

いずれの面も、ぱっと一目で見て興味を引き、まず紙面を手に取り読んでもらうことを目標として画像を大きく用いて構成しており、読んでみたいと思える魅力ある紙面づくりを目指しています。

【講評（令和6年全国広報コンクール）】

関東大震災から100年に寄せた防災啓発特集。同一箇所の新旧対比を見せる裏表紙は、読者に強いインパクトを与えている。

人命保全とトイレ問題に絞ったことが功を奏し、発信力が高められている。重要な観点と暮らしの中で準備すべきことやそのポイントが紹介されている。災害時のトイレの問題が具体的に、手順に沿った情報提供が丁寧にそれぞれ解説されている。これらは非常に有意義であり、読者に保存され、活用される号になったのではないかな。

伝統行事と不登校やがん検診を見開き画面上下にレイアウトしているのも、地域の広報紙ならではのものである。



【川崎市「かわさき市政だより」(8月号)】

【主たる記事の掲載意図】

多くの浮世絵や和歌、俳句の題材により東海道五十三次として有名な東海道。その起点・日本橋から品川宿を経て多摩川を渡ったところに開設された川崎宿は、2023年に起立400年を迎えました。

川崎宿の過去と現在の対比をわかりやすく1面で表現し、川崎宿当時の建物などは殆ど残っていないながらも、川崎大師への参拝客や東海道の旅人に宿を提供し、人々が行きかう場に商いをもち、文化を発展させながら人と人の心を結んできた川崎宿のスピリットが、現代へしっかりと受け継がれていることが読者に伝わるよう、2・3面の記事を作成しました。

取材の中で、東海道沿いにある各地の信用金庫が地域活性化につなげようと連携して企画した「御宿場印」があることを知り、記事を取り囲むように全ての御宿場印を載せることで、読者が川崎宿だけでなく東海道全体へも興味を抱いていただけるような紙面としました。

【講評(令和6年全国広報コンクール)】

特集は川崎宿の歴史的価値と文化、その担い手である住民の方々の顔が魅力的に描いている。トレンドをとらえたデザインであり、市民の声と顔の見える構成が好印象。今と昔をスマホと浮世絵で対比する表紙のアイデアもユニークだ。ワクワク感のある紙面ストーリーであるとともに、全体の情報整理はシンプルで整然と見やすく編集されている。

「情報ひろば」は住民への配慮が感じられ充実している。欄外脚注にリンク先一覧、集会募集マークの解説を繰り返すなど、情報伝達の工夫が見られ、広報誌の使命を果たそうという意図が感じられる。



【相模原市ウェブサイト】

【特色・ポイント】

○ トップページ

相模原の自然（山・川・湖）をモチーフにしたデザインとしました。背景には、山の緑、豊かな水からイメージした翡翠色（青緑）と浅葱色（水色）を使用しています。

見出しには落ちついた濃い緑色を使用し、読みやすく画面全体のイメージを引き締めています。

さらに市内の風景など、魅力のコンテンツを最上部に配置し、相模原の魅力が伝わりやすいトップページとなっています。また、画像を多用せず控えめにし、掲載する情報も必要最小限に抑えることで、より情報が見つけやすくなりました。

○ 全体

サイト全体の統一感を出すため、ヘッダーフッター等を統一しました。

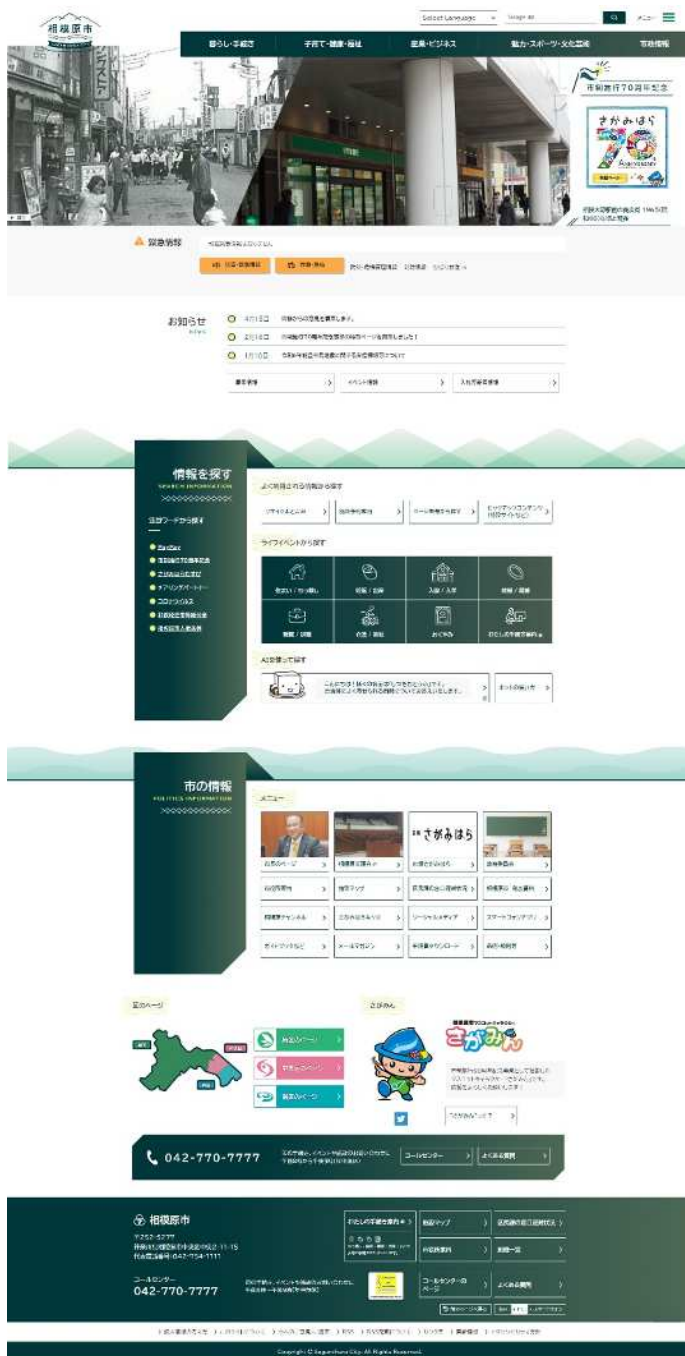
また、異なるデバイス（パソコン、スマートフォン、タブレット）から閲覧した場合にも、表示内容や表示順がなるべく同様になるようにしました。

【講評（令和6年全国広報コンクール）】

トップページ、各ページともにホワイトスペースが多く、スッキリとゆとりが感じられ好印象。色数もうるさくないよう絞り込んであり、掲載されている情報を受け取りやすくしている。アクセシビリティへの十分な配慮が見られる点もよい。

トップページは全体的にテキスト中心のシンプルなデザインである。余白があり、見やすい見出し、読みやすい文章で構成されている。「情報を探す」と「市の情報」のコーナーのタイトルとともに用いられている「山の重なり」と「流れの重なり」のビジュアル要素が良い。

スマホ版では常時表示されるメニューにグローバルナビとそのほかのナビゲーションが集約されている。どのページを見ても常にナビゲーションへの動線が確保されている仕様はユーザーにとって利便性が高い。



【厚木市「広報あつぎ」(6月1日号)

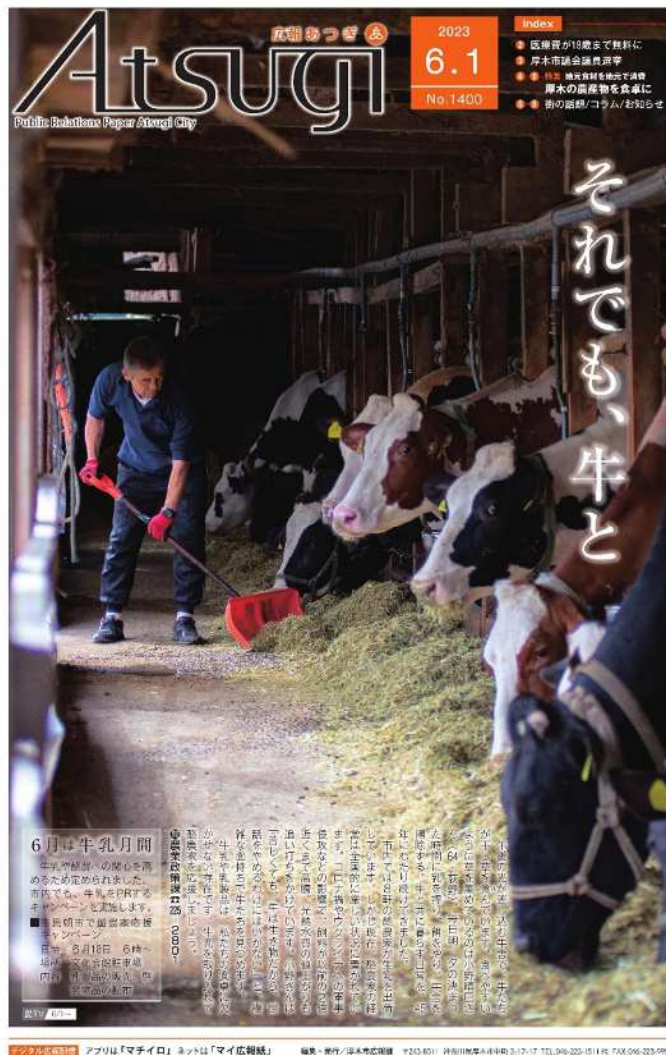
【掲載意図】

厚木市内では、8軒が酪農を営んでいますが、年々減少が続いています。こうした状況の中、ウクライナへの軍事侵攻などの影響で飼料は以前の2倍近くに高騰し、光熱水費も上がるなど、厳しい経営状況に置かれています。

市では、酪農家を応援するため、乳製品の消費を促すキャンペーンを実施しました。その告知に合わせ、市内の酪農家にスポットを当てた紙面を企画しました。

写真では、手塩にかけて育てている牛への餌やりの風景を写し、どんなに厳しい状況でも、毎日、一頭一頭の命と真摯に向き合っている様子を伝えられるよう意識しました。牛舎を下見した際、標準レンズでは画角に入る牛の数が少なくなることが分かったため、撮影本番では望遠レンズを用意し、少し離れた位置から圧縮効果で多くの牛の姿を捉えられるよう工夫しました。

長年使われてきた牛舎の雰囲気と、黙々と働く酪農家、穏やかな表情で餌を食む牛たちの姿から読者に日常を伝え、市内の酪農に関心が高まるような紙面を目指しました。暗すぎず、明るすぎない写真を目指し、光の差し込む量にも注意しました。



【講評 (令和6年全国広報コンクール)】

淡々と作業をする酪農家の日常を、さりりと切り取ったような、ドキュメント色の強い、しかし計算された一枚である。光の入りを計算し時間帯を選んでの撮影であつたろうことがわかる。暗い牛舎に自然光を差し込ませている。強い日差しでないため、全体的にやわらかい印象を与え、そっと照らすような光が「祈り」のような効果をもたらしている。事前にロケハンを行い、どのレンズが現場に合うかを念入りに検討し望遠レンズを選択したというのも素晴らしい。情熱があつてこそこのことである。

決して明るいニュースばかりでない酪農の状況を真正面から捉え、一人でも多くの人に知ってもらいたいという撮影者の熱意がよく伝わってきた。

【大磯町「広報おおいそ」(9月号)】



【掲載意図】

大磯町内に2校ある町立小学校（大磯小学校、国府小学校）の開校 150 周年の特集記事に合わせ、両校の在校生の協力のもと、各校の黒板に装飾を施し、それぞれの写真を組み合わせることで1枚の写真が完成するよう作成しました。

当町の広報紙は、A4 判、中折り、綴じなしの仕様で作成していることから、特集ページを2ページ及び 19 ページに配置、1ページ及び 20 ページ（表紙・裏表紙）をダブルカバーにすることで、当該ページを独立させることができるよう工夫し、より多くの町民に特集内容を発信できるよう、レイアウトの観点からも工夫しました。

また、特集記事では、開校 150 周年を記念としたイベントの開催情報を掲載するとともに、両校の歴史や両校の在校生及び幅広い年代の卒業生の皆さんから、当時の思い出を振り返っていただき、町全体で開校 150 周年を盛り上げていく内容の記事を作成し掲載しました。

【講評（令和6年全国広報コンクール）】

見開きにするときれいに黒板が繋がっているように見える。同じ場所の黒板かと勘違いしてしまうほど、合成が自然で、アイデアが輝く作品となっている。黒板のフォントのデザインなどを合わせていたり、構図などもきれいに揃えていたりしている。150周年記念の思い出深い撮影として素晴らしい。

組み写真というと多数の写真をレイアウトして構成するものという既成概念があるが、表紙と裏表紙を合わせて一枚にするという新たな発想でデザインレイアウトした作品である。新しいチャレンジで注目を集めて多くの読者が手にするようになるのは素晴らしいことである。